

332. 高齢者における体力と健康生活行動に関する因果構造分析 : SATプロジェクト15

著者	西嶋 尚彦, 中野 貴博, 岡田 あき子, 高橋 信二, 鈴木 宏哉, 大迫 剛, 久野 譜也, 石津 政雄
雑誌名	体力科学
巻	49
号	6
ページ	832
発行年	2000-12-01
権利	日本体力医学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00130785

332. 高齢者における体力と健康生活行動に関する因果構造分析：SATプロジェクト15

○西嶋尚彦¹，中野貴博²，岡田あき子²，
高橋信二²，鈴木宏哉²，大迫 剛²，
久野譜也¹，石津政雄³

¹筑波大学，²筑波大学大学院，³大洋村役場

【目的】介護を必要としない比較的元気な高齢者は、全体の80-90%を占めていると推察されており、高齢者の社会活動を促進するための基本的要件として、「生きがいつくり」と「健康づくり」を一体的に捉えることが重要であると指摘されている。高齢期における健康づくりと生きがいつくりを志向した健康生活を規定している要因を究明するために、高齢者における健康生活要因間の因果関係を検証することが必要である。そこで本研究では、運動・スポーツ活動に基づいた健康生活行動を中心とする高齢者における健康生活を構成する要因間における因果関係を検証することを目的とした。

【方法】調査対象は、茨城県大洋村の60歳以上の在宅高齢者146名であった。調査方法は集合調査法であった。調査内容と項目数は、体力（質問紙体力テスト）が20、日常生活活動（ADL）が16、健康生活行動が20、余暇行動が13、自覚的健康認識が2、生活満足（モラールスケール）が17、生活欲求（自己実現欲求など）が16、の7領域であった。各質問は4あるいは5件法で回答された。これらの項目（観測変数）に対して探索的因子分析、検証的因子分析、二次因子分析を用いて、健康生活に影響を及ぼす因子を検討した。多重指標モデルによる共分散構造分析を用いて、各領域を代表する因子（下位領域）から構成された健康生活要因間の因果モデルを検証した。パス係数等のパラメータの推定には最尤法を用いた。モデル適合度指標にはGFI、AGFI、CFI、NFI、RMSEA、AIC、CHI-SQ（カイ2乗値）などを用いて、観測変数間の分散・共分散に対する説明率、独立モデルに対する接近の程度、モデル修正の程度を確認した。統計解析にはAmos 4.0Jを用いた。

【結果と考察】高齢者の健康生活に影響を及ぼす7領域における二次因子モデルは、いずれも満足できる適合度を示し、二次因子構造によって測定項目および下位領域の構成概念妥当性が確認された。これらの7領域から構成される高齢者の健康生活の因果構造モデルは、満足できる適合度を示した。運動・スポーツ活動を中心とする健康生活行動が影響を与える要因は、健康生活行動→体力→ADL→自己実現欲求、健康生活行動→体力→健康認識→生活満足→自己実現欲求、健康生活行動→余暇行動→自己実現欲求に有意なパス係数が得られた。高齢者の自己実現欲求に直接的に影響を与える要因は、余暇行動、ADL、生活満足であった。

【まとめ】共分散構造分析を適用することによって、高齢者の健康生活の構成要因間における因果関係が確認された。高齢者における健康生活の構成要因である健康生活行動、体力、ADL、余暇行動、健康認識、生活満足、自己実現欲求との間における因果関係が検証された。

共分散構造分析、二次因子分析、健康生活